

いま、なぜ「リベラルアーツ」なのか？

近藤文化・外交研究所 代表（元文化庁長官） 近藤 誠一

【略歴】

1946年生。東京大学教養学部教養学科卒、1972年外務省入省。ユネスコ大使、駐デンマーク大使。2010年文化庁長官（～2013年）。退官後近藤文化・外交研究所、（一社）TAKUMI-Art du Japon 等を設立。東大特任教授等を務めた他、現在国際ファッション専門職大学学長。

（叙勲）： レジオン・ドヌール・シュバリエ章（仏2006）、瑞宝重光章（平成28年）等受賞。

（著作） 『外交官のアラカルト』、『近藤誠一全集』第一巻～第三巻等著書、論文多数。

学問やテクノロジーの急速な進歩は、必然的に専門化と細分化を進める傾向を強めている。これに対して総合知、あるいはリベラルアーツの復活を訴える声も高まっているように見える。最先端の如何なる専門知も、単独で現在人類が直面している難問を解決することができないのは明らかだからだ。

しかしこれに対する社会の反応は鈍い。企業や国家にとって経済成長や安全保障は当面の死活問題である。そしてそれを支える先端テクノロジー分野における激しい競争の中で個人や組織に求められているのは、「効率性」すなわち最小限の時間とコストで早期に目に見える目標を達成することだ。

他方リベラルアーツは、「何をすれば、どうなる」という具体的な目標がなく、成果が出るのに時間がかかる上に、数字で評価することができない。このように明確な結果がでないことに時間と労力を費やすことは、コスパ（コストパフォーマンス）も、タイパ（タイムパフォーマンス）も悪い。そのようなリベラルアーツが、現代社会においていつ、どこで、どのように役に立つのか具体的に示さぬ限り納得はしてもらえない。それが今の世界の価値基準となっているように見える。

しかしそこにこそ落とし穴がある。リベラルアーツのそもそもの由来をたどれば、中世ヨーロッパの大学で生まれた概念で、肉体的・精神的拘束を受ける奴隷的労働から解放されて、「自由人」として真理を極めることを助ける術（すべ）を指す。当時は「自由七科」と言われる文法、弁証法、修辞学、算術、幾何学、音楽、天文学を指していた。文理を超えた幅広い知識を差し、日本語の「教養」に近い概念とされる。

21世紀においてこの問題を考えるに当たって重要なことは、ここにどの学問分野が含まれているかではない。当時の知識人が、自由人として「外部からの束縛から自由」になって思う存分考えることができることを尊び、誇りにした点だ。では奴隷制はなく、何でも自由に学べる今の社会においてなおリベラルアーツが重要なのは何故か。

それは、今のわれわれは「固定観念」によって立派に「奴隷」にされているということだ。それは「経済は成長しなければならない」（経済成長主義）、「専門家は偉い」（専門知識重視）、仕事の成果は迅速に、かつ目に見える数字で表わさなければならない（短期成果主義、数値主義）という評価基

準が、誰もチャレンジできない「常識」となっているのだ。これがもたらす弊害は大きい。

例えば本来極めて重要だが数字にならないものを評価の対象から外したり、被評価者が良い評価を受けるために「数字になる」作業にばかり集中したり、「数字合わせ」に走ったりすることなどだ。人文系の学問を一年間に書いた論文の数や引用された回数で評価することはその典型だろう。仲間同士でお互いの論文を引用し合って数字を稼ぐことまで行われているという。

この評価が収入に結び付くことで、あらゆる分野でリスクをとる勇気を削ぎ、イノベーションを阻害する。観察対象の変化を安易に「平均値」の変化で判断して実態を見失うリスクもある。平均株価の上下や、平均所得の上下で経済を評価し、そこに隠された「格差」に目がいかない（ジェリー・Z・ミュラー 『測りすぎ』）。

数学には「人間の日常的な感覚では獲得できないような想像力を与え」という素晴らしい効能がある（2024年4月3日付日本経済新聞p. 29）。しかし数字による成果の計測が一見客観的で便利だということでそれが行き過ぎて逆効果になっている。ツールに過ぎない「数字」が、今や我々の奴隷主になっているのだ。

リベラルアーツは古典、芸術、3つの科学などすべての人間の知性をカバーしているので、知恵の宝庫だ。現実の問題の解決方法は、ひとつひとつ、そして個人個人の置かれた状況によってさまざまなので、「リベラルアーツはこのように役立つ」という一般的答えもなければ、いつどのように役立つかを予め予測することもできない。しかしそこで知ったある分野のひとつの知恵が、全く違う分野の理解に役立つことを発見するのは楽しいものだ。福岡伸一教授の「動的平衡論」が『方丈記』とつながるように。

こういった例は、いまの時代のわれわれが目先の物事の処理に囚われているうちに、いつの間にか中世西欧の奴隷制に類似した精神の奴隷制、すなわち自分で設定した評価基準の利便性に惹かれてその虜になっていることを気づかせてくれる。

自然界には数字で測れぬものが多く、自然科学が見つけたものはそのごく一部に過ぎないこと、理性と感情を併せ持つ人間も全く同様で、自分でつくった理念体系を実行すること、すなわち数字や効率性に100%従うことはできないこと、それを強行することは人間性の劣化（効率性の奴隷化）につながることを常に心に置いておかねばならない。

もっともハラリが言うように、人類は自らつくったテクノロジーの力によって生態系の軛から離脱し、アルゴリズムですべてを動かせる「ホモ・デウス」への質的「進化」をする方向に向かっているのであれば、われわれがこれまで思考の大前提として捉えてきた自然の摂理や、感情をもつ人間性、人と微生物との間の相互作用の尊重というものもまたひとつの狭い「思い込み」であることが証明される日が来るのかも知れない。

今後の酵素の研究と知識の深化が、何らかのヒントを与えてくれるかも知れない。